

アゼオトギリ守ろう

福井県立
坂井高など 増殖した苗を移植

【ふくい】福井県立坂井高校は、環境省の絶滅危惧種ⅠB類に指定される畦畔(けいはん)の雑草「アゼオトギリ」の保全活動に関わり11年目を迎えた。2日には校内で増殖した苗を自生地の坂井市丸岡町板倉に提供して地区住民と共に移植し、ふるさとの自然環境を守っている。

アゼオトギリは畦畔や湿地に生える多年草だが、環境の変化で全国的にも減少している。県内では、国営バイパスの工事前環境調査で板倉周辺の畦畔に自生していることが2008年に初確認された。絶滅の恐れがあったため、自生株を県立大学に移して保護。14年から同校が引き継ぎ、校内の域外保全区や水田ビオトープで苗

作りをして、毎年この時期に移植している。同校食農科学科農業コースで草花の課題研究に取り組み3年生4人とOB2人、地区住民ら30人ほどが参加。13株を根が張るよう丁寧に植え付けた。生徒に、いつ花が咲くのか、定期的な草刈りが必要なのか、などと質問する住民もあった。草花班リーダーの下

川千咲生さん(18)は「保全活動には地域の協力が必要なので、これからも地道に続けて活動を知ってもらいたい」と思いを込めた。農地・水・環境保全に

取り組む板倉みどりクラブの田中正之代表は「雑草だけど大事な希少植物。子どもたちと一緒に管理しながら必要性を伝えていきたい」と話していた。



生徒に植え方を教わりながら「アゼオトギリ」の苗を移植する地元住民